

② かくし船

織田信長なきあと、秀吉は次々と勢力をのぼし、天正十三年には、なかなか秀吉に従おうとしなかった根来寺の僧兵たちを攻めほろぼし、雑賀一族には紀ノ川の水をせき止めて、得意の水攻めを始めた。

城のまわりはすっかり湖のようになってしまった。こうして雑賀の城も攻め落とされてしまった。紀伊の国を従えてしまうと次のじゃまものは四国の長曾我部元親だった。根来の僧兵や雑賀の武士、そしてこの四国の長曾我部元親などは、敵の家康についていたので、秀吉から大層憎まれていたのであった。

「さあ、今度は四国だ。なんとか一息に攻め落としたいものだ。」

「秀吉様、今度はそううまくいきません。相手は海の向こう、船がたくさんいります。なにしろ何万という兵を運ばなくてはならないのですから。」

「何かよい知恵はないか。」

「この地方の漁師どもの船を集めたらいかかなものでしょう。この前、熊野街道を通った時に、確か塩津という所にたくさんさんの船があったと家来どもが申しておりました。」

「さっそく塩津の庄屋へ使いをとばせ。」

こうしてすぐ軍船調達の命令が塩津へ届いたのです。

「えっ、船を？」

塩津の庄屋、磯崎彦太夫は青くなつた。浜の漁師たちにとつて船が命なのだから。

(さあ、漁師たちに何と云つて話そう。) 彦太夫は、はたと困り果てた。

「オーイ、大変じゃ。寄合じゃ。氏神さんに集まれ。」

さつそく、村の世話役がお宮に集められた。

「秀吉様から、船を調達せよと言つてこられた。船がないとお答えしたが聞き入れてくだらないのじゃ。」

「おれたち漁師にとって、船がないと死んだも同然、これだけは従えねえや。」

「しかし、秀吉様に逆らつて、至る所で村を焼かれたり、港を焼き払われたりしているそう。逆らつたら大変なことになる。」

人々は毎晩遅くまで話し合つた。しかし、これといつていい考えがうかばなかつた。その時、突然、彦太夫が立ち上がった。



「船をかくそう！」

—みんなしーんとしてしまった。

それは大変なことだと知っていたのだ。誰一人せきをする者もなかった。

彦太夫は目を閉じた。自分一人が犠牲になればよいのだと心でそう思った。

「かくすのだったら、露の浜がよい。」と誰かが言った。

「あそこは、まわりが山だ。外から見えにくい。」

すぐさま、みんなは仕事にとりかかった。

「大きな船だけかくそう。小さい船は秀吉様も用はないだろう。」

こうして小さい船だけを残して、大きな船からかくしていった。

「その方が彦太夫か。おもてをあげい。」

「浜には本当に船がないと申すのか。」

「はい。私どもの浜は半農半漁の小さい港で、船といっても小さい船ばかり。これでは大勢の兵士を乗せる船としてお役に立ちません。何とぞお許しを…。」

「うそを申せ！。家来の話によると、熊野街道から大きな船がたくさん見えたと言っているではないか。」

「それは幻の船の見間違いで…。」

「何、幻の船？」

「時たま、小さな船が日の光に反射して空に写り、大きく見えることがよくあるのでございます。これを漁師たちは幻の船と呼んでいます。」

その翌年、天正十四年、大阪を遠く離れた関東地方や九州地方を除いては、秀吉の勢いに手向かう者がいなくなってしまう。そして、大名のかしらとして勢力をもち、関白という一番高い位について。姓も羽柴から豊臣と名乗った。

そんな時、塩津の浜では、少しずつ船を出して漁に出てはまたかくすという生活が続いていた。貧しかったけれど、みんな助け合って生きていた。

また年が明けて、天正十五年二月の寒い朝、突然役人が手下を連れて塩津の浜にやってきた。

かくし船のことがどうとう秀吉様に知れたのだ。

「庄屋、彦太夫、その方召し捕りに参った！ 身に覚えがあるろう。よくも秀吉様にたてをついたな。」

「はっ、覚悟はできています。」

「本来ならば、塩津の浜を全部焼いてしまふところだが、このところ秀吉様はおめでた続き。今じゃ、聚楽第というぜいたくの限りを尽くした城のような大きな屋敷を造っていなさる。それ



に免じて浜や漁師どもは助けてやるというお達しじゃ。そのかわり、庄屋、彦太夫は打ち首じゃ。」
「ハッ、ありがたき処置にして、彦太夫心からお礼申しあげます。」

彦太夫は眉一つ動かさず、自分一人でよかった、私一人の命で塩津の浜が救えたのだから、本当によかったと思った。